



穏やかな春の日差しを肌で感じることができる季節になってまいりました。

日本では旧暦3月を『弥生(やよい)』と呼び、現在でも3月の別称として用いますが、弥生の由来は草木がいよいよ生い茂る月「木草弥や生ひ月(きくさいやおひづき)」が詰まって「やよい」となったようです。

万物が成長する春を迎え、冬の厳しい寒さを乗り越えた子どもたちにも1年間の成長の跡が見られます。学校としても今年度を振り返り、新年度の教育活動が充実するよう改善を重ねながら前進しています。

6年生にとっては、小学校生活最後の月となりました。この1年間、リーダーとして大海小学校を引っ張ってってくれました。登下校のときは班のみんなの世話をして事故に遭わないように見てくれました。「ようこそ1年生集会」や「運動会」など大きな行事では、中心になって活躍しました。このほかにもたくさんの場面で学校のために働いてくれました。学校にとっては頼りにしている6年生ですが、ずっと頼ってばかりいるわけにはいきません。良い伝統をしっかり残して在校生にバトンタッチしてほしいと思います。また、在校生もその思いをしっかりと受け取ってほしいと思います。

さて、話は変わりますが、先日学校に「箸の持ち方」というDVDが届きました。とうとう、箸の持ち方まで学校教育の中に入ってきたかと思ってしまいました。学校がそこまでしなければならないことなのでしょうか。

箸の持ち方は家庭での躰の範疇です。毎日3食食べるとすると、1週間で21回の食事があります。学校の給食は週5回あり、その中で米飯は3回です。3回の給食で箸の持ち方を教えながら食事をするのは到底無理なことです。給食時には、各々が分担をして仕事をします。給食前に机を拭く、運搬ワゴンを教室まで持ってくる、配膳台に食器と牛乳を乗せる、盛りつけをする、お盆に載せて配膳された給食を運ぶなど、みんなで給食をいただけるよう指導しています。家庭と違って、グループで関わりながら給食を指導することが学校の役割だと思います。ですから、そこで個人の箸の持ち方までを指導することはとてもできません。ただ、子どもの箸の持ち方を見て気づいたことは、箸の持ち方の下手な子は鉛筆の持ち方も下手であると言えます。

その他、家庭での躰といえば、あいさつ、整理整頓、脱いだ履物をそろえること、掃除などたくさんあります。

躰というのは、人との関わりで相手に対する誠意を示すことです。「お世話になります」「有り難うございます」「ごめんなさい」ということを口では簡単に言えますが、それを態度として、行動して示さないと意味がありません。吉田松陰は、野山獄の中で囚人たちに講義した記録である『講孟余話』の中で、「いくら人がよくても知性があっても、行動に移さないと意味がない」と書いています。「躰」という漢字は、身が美しいと書きます。身は、身なりでもあり中身でもあります。その漢字も日本人が考え出した国字で、中国ではこれに類する漢字はありません。漢字の成り立ちを考えながらご家庭でできる躰、学校でできる躰をし、世の中に出しても恥ずかしくない人間に育てていきましょう。